

Title	狂言小舞の動作単元データベース作成のための基礎研究
Sub Title	Classification of data on movement units in kyogen Komai to make a database for a movement dictionary of traditional dance.
Author	小林, ゆい(Kobayashi, Yui)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2004
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.43, No.1 (2004. 1) ,p.1- 6
JaLC DOI	
Abstract	<p>The aim of this study is to classify the movement units in Kyogen Komai, one of Japan's traditional performing arts, to make a database for a movement dictionary of traditional dance. In this study we used the 204 terms (names of movement units) of the Hada and Matsumoto study and made a table of 230 movement units based on movement characteristics. The table first classifies the units into 9 classes: Posture, Movement, No Movement, Arms, Legs, Torso, Head, Basic Phrase, and Others. There are also 13 items of information related to these movement units: number, name, pronunciation, if it appears in another classification, number assigned in the Hada and Matsumoto study, differences between Okura-ryu and Izumi-ryu, the parts of body moved, other names, explanation of the movement, other written names and similarities to Noh, title of repertory, follow-on movements, and meanings.</p> <p>What is clear after classification is that the arms are the most frequently used parts of body. The legs and head bear only a minimal relationship with the torso. The meaning of a movement unit and the actions involved are easily deduced by its name, except in the Basic Phrase class where the actions are easily deduced from the name, but the meaning is not.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00430001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

狂言小舞の動作単元データベース作成のための基礎研究

小林 ゆい*

Classification of data on movement units in Kyogen Komai to make a database for a movement dictionary of traditional dance.

Yui Kobayashi¹⁾

The aim of this study is to classify the movement units in Kyogen Komai, one of Japan's traditional performing arts, to make a database for a movement dictionary of traditional dance. In this study we used the 204 terms (names of movement units) of the Hada and Matsumoto study and made a table of 230 movement units based on movement characteristics. The table first classifies the units into 9 classes: Posture, Movement, No Movement, Arms, Legs, Torso, Head, Basic Phrase, and Others. There are also 13 items of information related to these movement units: number, name, pronunciation, if it appears in another classification, number assigned in the Hada and Matsumoto study, differences between Okura-ryu and Izumi-ryu, the parts of body moved, other names, explanation of the movement, other written names and similarities to Noh, title of repertory, follow-on movements, and meanings.

What is clear after classification is that the arms are the most frequently used parts of body. The legs and head bear only a minimal relationship with the torso. The meaning of a movement unit and the actions involved are easily deduced by its name, except in the Basic Phrase class where the actions are easily deduced from the name, but the meaning is not.

1. はじめに

能・狂言の研究の多くは、歴史、伝書、作品、構造等に関するものが多く、演技動作について検討されることは少ない。一般に能・狂言の演技動作については、序破急にもとづくリズムがある、能の動きは抽象的であるのに対して狂言は写實的、あるいは緩急が強くなるなど言われているが、筆者（小林1999）はこれまでに、狂言役者、能役者、狂言稽古者の基本姿勢（構工）、歩行（ハコビ）、代表的な所作にみられる動作特性について実証的に検討し、これらの特徴を生み出すメカニズムを明らかにすることを試みた。

また、能・狂言の演技動作と他の日本の伝統芸能、あるいは世界の芸能とを比較すると、大きな特徴として“すり足”で行われる歩行動作に上下動が少ないこと、

演技に人間の表情を用いないこと、基本姿勢を含めて直線的な動きが多いことなどが上げられる。これらの動作特性を実証的に検討した報告として、森下・花城（1979）による能、琉球舞踊、バレエにおける歩行時の筋放電について調べたものなどが上げられるが、能・狂言において演じられる動作の種類に注目し、その分類から他の芸能との比較検討を行った報告はみられない。

そこで本研究では、他の芸能との比較も可能となるような動作学的な指標に基づく狂言（狂言小舞）における動作単元分類一覧の作成を試みた。作成にあたって用いた動作単元（注1）は、羽田・松本（1982,1985）による「狂言の動作単元」一覧において取り上げられたものとした。また、本分類一覧を作成する目的は、狂言小舞の動作の種類に関する特徴を明らかにすること、さらに狂言小舞の動作単元データベース作成のための基礎資料として活用することにある。

*慶應義塾大学体育研究所助手

¹⁾ Instructor, Institute of Physical Education, Keio University

2. 動作単元の分類

能・狂言において演じられる動作の全ては、様式化された名称を持った動作単元で構成されている。能の動作単元については、横道（1992, 1992）による流派別の「主要所作単元名対照表」や、能と狂言を扱った「所作単元一覧」があげられる。横道による一覧において狂言の動作単元は“狂言小舞その他の所作単元”項目に38取り上げられている。本研究において用いる羽田・松本（1982・1985）による分類では、注2に示した代表的な形付を用い、現在上演される狂言二流派の狂言小舞に登場する全ての204単元を取り上げ、7つの第一項目、21の第二項目に分類をし、動作の説明がなされている。能・狂言における動作の分類において、このような全単元を取り上げた分類は他にみられない。

ところで、他の日本の芸能における動作単元を取り上げた報告には日本舞踊（1966, 1981）、琉球舞踊（1991）などが上げられる。しかしいずれもその分類は、各自がその芸能に固有の項目を立てたものであり、また全ての動作種類が取り上げられたものではない。そこで本分類では、これまでの先行研究を参考とし、他の芸能との比較が可能となるような動作学的指標を用いて表1に示すような9つの第1項目、22の第2項目を立てた。

表1 動作学的指標に基づく狂言小舞の動作単元一覧分類項目

1	姿勢	a	立った構工
		b	座った構工
		c	寝た構工
2	移動	d	歩行（運び）
		e	這出
		f	膝行
		g	飛び
		h	回る（旋回）
		i	回る（回転）
3	その場の動き	j	向く
		k	座
		l	礼
4	上肢（腕・手）	m	上肢の動き
5	下肢（脚・足）	n	蹴る
		o	伸び
		p	拍子
6	体幹	q	体幹の動き
7	頭部	r	頭部の動き
8	基本動作	s	基本動作
9	その他	t	道具の扱い
		u	特殊な型

3. 本分類の特徴

表2に狂言小舞における動作学的指標を用いた動作単元の分類一覧の一部を示した。羽田・松本による一覧においては、単元により第3項目までが立てられ、それぞれに説明情報が書かれてある。しかしこの情報は、単元によっては複数の要素にまたがる内容が書かれ、統一性がみられない。そこで本分類では、この情報を、ふりがな、別名、動作の説明、別表記、能の単元との比較など、含まれる曲名、前後に続くことのある単元、動作の意味とに区分表記をした。さらに新たに、単元番号、羽田・松本による一覧分類番号、流儀別異同、動かす身体部位の区分を加えた。また本一覧は今後データベース作成の元資料として活用させるために、同一単元を複数の項目で取り上げることとし、重複する単元の区分ももうけた。

各項目、区分に関する細かい内容は次のとおりである。

項目

第1項目：他の芸能にも共通して分類可能と考えられる9項目を立てた。静止姿勢と動きあり、移動動作とその場の動作、身体部位に着目した3つの観点から項目を立てた。

第2項目：他の芸能にも共通して分類可能と考えられる21項目を立てた。

第3項目：第1項目2移動においては、方向を区分した。第1項目9その他のうち、第2項目道具の扱いにおいては、扇、杖、傘を持つ区分を設けた。

第4項目：第1項目4上肢（腕・手）においては、指、袖の区分を設けた。第1項目9その他のうち、第2項目道具の扱い、第3項目扇においては、閉ジ扇と開キ扇の区分を設けた。

区分

- ① 単元番号：複数の項目に重複する単元も、異なる項目に含まれる度に1単元として換算し、全230単元となった。
- ② 動作単元：羽田・松本による一覧に登場した単元を扱うものとした。
- ③ ふりがな：羽田・松本による一覧ではふりがな表記は一部であったが、本一覧では全ての単元にふりがなをつけた。
- ④ 重複する単元：複数の項目に重複する単元には、※印を表記した。
- ⑤ 羽田・松本一覧の分類番号：羽田・松本による分類番号を表記した。

表2 動作学的指標に基づく狂言小舞の動作単元一覧(一部)

第1項目	第2項目	第3項目	第4項目	①単元番号	②動作単元	③ぶりがかな	④重複する単元	⑤羽田・私本一覧の分類番号	⑥流儀別異同	⑦動かす身体部位	⑧別名	⑨動作の説明
1 姿勢(構え)	a 立った構え			1	常ノ構工	つねのかまえ	-	I A1	同名同意	全身	構工	軽く膝をまげて重心を低くし、腰を伸ばして胸を張り、あごを引く。両腕は外側へ張り、指をにぎる。
	b 座った構え			4	下二居ル構工	したににいかまえ	*	I A4	同名同意	全身	-	右膝を床につけて腰を落とし、左の膝を立てる。
				5	安座ノ構工	あんざのかまえ	-	I A5	同名異意	全身	-	あぐらに似た姿勢。大藏流では、正座の左足を前にした形。和泉流では、足を前で交差させて組む。
2 移動	c 寝た構え			6	寝た構え	ねたかまえ	-		同名同意	全身	-	-
	d 歩行(運)	前進		7	摺り足	すりあし	-	I B1	同名同意	両下肢	出ル	足を摺って出し、爪先や踵をなるべく浮かせないように歩く。
		前後		12	鏡ノ扇	かがみのおうぎ	*	v Q7	同名異意	両上肢、両下肢	大藏流では、上ゲ端	開キ扇を横から大きく顔の前に立てて出し、つぎに下がりがながら扇を上げて元の構工になる。
		後退		14	下ル	さがる	-	II E5	同名同意、異表記	両下肢	-	前を向いたまま後方へ下がる。
		左右		19	横足	よこあし	-	I B3	同名同意、異表記	両下肢	-	左右いずれかの足を出し、それにもう一方の足をまたかかせる動作をくり返して進む。
		その他		20	浮キ歩キ	うきあるき	-	II E3	同名同意	両下肢	-	〈浮キ〉ながらある地点まで行く。
	e 還出	前進		23	還出	はいだし	-	II E4	同名同意、異表記	両上肢、両下肢	-	四つ這いになって前へ出る。
	f 膝行	前進		24	膝行	しっこう	-	IV J3	同名同意	両下肢	-	交互に〈膝立ち替エ〉ながら前へ出る。
	g 飛び(脚蹴)	前進		26	一足飛び	いっそくとび	*	II G1	同名異意	両下肢	-	大藏流では、両足を揃え飛ぶ。和泉流では両足をそろえて前方へ飛び上がる。
		後退		27	飛び下り	とびさかり	-	II G2	同名異意	両下肢	-	大藏流では、後方へ抜くように飛び下がる。一つ後ろへ飛ぶのが原則。和泉流では、両足をそろえ、後方へ飛ぶ。
		その他		29	飛び込ミ	とびこみ	-	II G3	和泉流のみ	両下肢	-	左・右と足を上げて飛ぶ。
3 その場の動き	h 回る(廻回)			38	回ル	まわる	-	I E10	同名同意	両下肢	-	舞台を一回りする。
	i 回る(回転)			45	急回り	きゅうまわり	-	I F1	同名異意	両下肢	-	大藏流では、両足をねじりながらぐるりとすばやく回る。和泉流では、片足を軸にして、ぐるりとすばやく回る。
	j 向く			52	向ク	むく	-	II D1	和泉流のみ	両下肢	-	体全体を一定の方向へ向ける。
	k 座			59	片膝	かたひざ	*	IV J1	同名同意	両下肢	膝ツキ	右膝を床につけて〈下二居ル構工〉になる。
	l 礼			62	片膝礼	かたひざれい	-	IV J4	同名異意	全身	礼、礼拜	〈片膝〉のまま手を床につけ、頭を下げて礼をする。大藏流では、両手をつくことはなく、開き扇を左に取り前へさし出す。和泉流では、両手をつく場合と、開キ扇を左に取り前へさし出す場合とがある。
4 上肢(腕・手)	m 上肢の動き			66	上ゲ	あげ	-	v N1	同名同意	右上肢	-	前に出した扇を上へ上げる。開キ扇と閉ジ扇と両様ある。
				96	指サシ	ゆびさし	-	v N29	同名同意	片上肢、両下肢	-	半身に構え、腕を大きく動かし、左右いずれかのさし指で扇をさす。
				99	袖打子	そでうち	-	v O1	和泉流のみ	両上肢	-	左袖口を持って前へ出し、その左手を扇で打つ。
5 下肢(脚・足)	n 蹴る			104	跳ネ足	はねあし	-	IV K2	同名同意	両下肢	-	両足を片方ずつ前へ蹴り上げる。
	o 伸			105	伸ビ立ツ	のびたつ	-	IV K3	同名同意	両下肢	-	両足爪先立って伸び上がる。
	p 拍子			107	一ツ拍子	ひとつひょうし	-	IV L1	同名同意	片下肢	-	-
	q 体幹の動き			119	透見	すきみ	*	v P2	和泉流のみ	右上肢、両下肢、体幹	-	開キ扇を右横から顔の前へ立てて出し、一度腰をかかめから爪先で伸び上がり、扇の骨のあいだから向こうを見る。
7 頭部	r 頭部の動き			120	首振り	くびふり	-	v M1	同名同意、異表記	頭部	-	首を左右に振る。
8 基本動作	s 基本動作			130	サン	さし	-	III H	同名同意	右上肢、両下肢	-	〈常ノ構工〉で、片腕を横から胸の前・肩の高さにし出し、同時に、足を前に出して、そろそろ右足を半歩前に出る。
9 その他	t 道具の扱い	扇の持ち方		144	閉ジ扇 常持子	とじおうぎ つねもち	-	I C1a	同名異意	右手	-	要を掌ににぎりこみ、大藏流では要もとを薬指と小指でしっかりと、和泉流では小指でしっかりとおさえる。
		扇を用いる動作		147	開キ扇 常持子	つねもち	-	I C2a	同名同意	右手	-	要もとを薬指でおさえ、親指を外側に出してにぎる。
		杖を用いる動作		154	上ゲ扇	あげおうぎ	-	v Q1	同名異意	両上肢	大藏流では、差シ出シ	開キ扇を左に取って下げ、大藏流では構えるように、和泉流ではすくように前へ水平に出す。能の〈上ゲ扇〉とは異なる。
		傘を用いる動作		179	左ニトル	ひだりにとる	-	VII S1	-	-	-	-
		エノリを用いる動作		183	ヒラク	ひらく	-	VII T1	同名同意	-	-	-
				188	左ニトル	ひだりにとる	-	VII U1	和泉流のみ	-	-	-
				199	扇夕型	あおぐかた	-	VI R1	和泉流のみ	両上肢	-	開キ扇を左右に動かして火をおこす所作。

表2 動作学的指標に基づく狂言小舞の動作単元一覧 (一部)

第1項目	第2項目	第3項目	第4項目	①単元番号	②動作単元	⑩別表記、能の単元との比較など	⑪含まれる曲名	⑫前後に続くことの多い単元	⑬動作の意味	
1 姿勢 (構え)	a 立った構え			1	常ノ構工	能・狂言が共通する基本姿勢。				
	b 座った構え			4	下二居ル構工	〈片膝〉〈膝ツキ〉などと記す。				
	c 寝た構え			5	安座ノ構工	「寝舞」には安座して後方に両手をつく特殊な型がある。				
				6	寝た構え					
	2 移動	d 歩行 (運)	前進		7	摺り足	能・狂言が共用する基本動作。			
			前後		12	鏡ノ扇	『正本』は〈鏡二見 上ゲ〉と記す。	「海人」「桑の弓」「柳の下」「七つに成子」など。		大藏流では、能の〈上ゲ端〉と同じだが、抽象的な所作ではなく、空・月・雲などを見上げる表意的な所作。和泉流では、能の〈上ゲ扇〉と動きは同じだが、能のように抽象的な型ではなく、鏡に映し見るといふ表意的な型。
		後退		14	下ル	大藏流では〈後ズサリ〉とも記す。和泉流では〈後下リ (うしろざがり)〉と記すことが多い。	「昧の明星」「放下僧」「酒の舞」など多数。			
		左右		19	横足	大藏流では〈抜イテカケル〉〈チガハヘ〉などと記す。『正本』では〈チガハヘ足〉と記す。	「景清」など。			
	e 遣出	その他		20	浮キ歩キ		「海老すくひ」「御田」など。			
	f 膝行	前進		23	遣出	大藏流では〈四臥し〉〈四ツバイ〉などと記す。	「幼けしたるもの」「忍ぶ其夜」など。			
	g 飛び (新躍)	前進		24	膝行		「海老すくひ」など。			
		前進		26	一足飛び	単に〈飛〉と記す。	「海人」「景清」「幼けしたるもの」「兎」など。			
		後退		27	飛び下り	〈後飛〉〈飛退〉などと記す。	「幼けしたるもの」など。			
		その他		29	飛び込み	『小舞謡』は別に〈飛技足〉を立てる。	「幼けしたるもの」など。			
	h 回る (旋回)			38	回ル	〈左回り〉(『正本』は〈順回り〉と記す)と〈右回り〉(同じく〈逆回り〉と記す)との両様がある。	「よしの葉」「七つに成子」など多数。			
	i 回る (回転)			45	急回り	大藏流では〈切り返し〉〈クルリと小回り〉(キリット回り)と記す。和泉流では〈左急回り〉〈右急回り〉の二種がある。『正本』は〈クルリと小回り〉と記す。	「海人」「放下僧」「芦刈」「幼けしたるもの」など多数。			
3 その場の動き	j 向く			52	向ク		「海道下り」「酒の舞」など多数。			
	k 座			59	片膝		「海人」「景清」など多数。			
	l 礼			62	片膝礼		「三人夫」「雪山」「菊の舞」など。			
	m 上肢の動き			66	上ゲ		「鶴御」「鉄輪」など。			
4 上肢 (腕・手)				96	指サシ		「柳の下」「福の神」など多数。			
				99	袖打チ		「海道下り」「春雨」など。			
5 下肢 (脚・足)	n 蹴る			104	蹴ネ足		「水車」「鮎」など。			
	o 伸			105	伸ビ立ツ	『正本』は〈伸上ル〉と記す。	「梅の舞」「名取川」など多数。			
6 体幹	p 拍子			107	一ツ拍子		「七つに成子」「日吉は山王」など多数。			
	q 体幹の動き			119	透見		「七つに成子」「小山伏」など。			
7 頭部	r 頭部の動き			120	首振り	大藏流では、〈頭振り〉と記す。	「鮎」「通門」「野老」など。			
	s 基本動作			130	サシ		「昧の明星」「桜川」など多数。			
9 その他	t 道具の扱い	扇の持ち方		144	閉キ扇 常持チ					
		扇を用いる動作		147	開キ扇 常持チ					
		扇を用いる動作		154	上ゲ扇	『正本』は〈扇左ニトリ返シテサシ上ゲ〉などと記す。	「鶴御」「通明寺」「芦刈」「松の舞」など。			
		傘を用いる動作		179	左ニトル		「をかしき天狗」「忍ぶ其夜」			
		エブリを用いる動作		183	ヒラク		「祐護」			
				188	左ニトル		「野老」			
	u 特殊な型			199	扇グ型		「通門」			

- ⑥ 流儀別異同：大蔵流と和泉流の同名同意，同名異意，同名同意・異表記あり，大蔵流のみ，和泉流のみを表記した。
- ⑦ 動かす身体部位：身体部位を，頭部，上肢（両上肢，片上肢，右上肢，左上肢，右手，左手），下肢（両下肢，片下肢），体幹，全身の5つに区分し，表記した。
- ⑧ 別名：羽田・松本による分類において「別名〇〇」あるいは「〇〇とも」と書かれたものを表記した。
- ⑨ 動作の説明：羽田・松本による説明を表記した。
- ⑩ 他の表記，能の単位との比較など：羽田・松本による情報を表記した。なお，ここで表記された出自資料の省略名は，注釈2に示した。
- ⑪ 含まれる曲名：羽田・松本による情報を表記した。
- ⑫ 前後に続くことの多い単位：羽田・松本による情報を表記した。
- ⑬ 動作の意味：羽田・松本による情報を表記した。
なお，いずれの場合にも，羽田・松本による一覧において情報が書かれていない項目には，横線を表記した。

4. 狂言小舞の動作の種類に関する特徴

狂言（本狂言）の演技における，役柄，感情表現などすべての動作は，狂言小舞の身体訓練により修得されると演技者によって述べられる（山本2002）。このことから狂言小舞の分類は，同時に狂言全体の動きを分類することにも繋がるが，本一覧を作成することにより，次のような特徴がみられた。

静止姿勢と動きがあるものとの観点からみると，静止姿勢は第一項目姿勢にあたる6単位のみであった。

移動動作とその場の動作との観点からみると，その場の動き（全身で行うもの）の分類には，向く，座，礼の3種類しか存在しなかった。そのうち向く動作には7単位みられるが，一度方向をかえた向きを正面に直す「直る」と首の方向を正面に向ける「キメ」以外では，いずれも向く方向がはっきりと決められていなかった。また頭部と体幹は「キメ」以外では常に同じ方向を向くものとされていた。単位数では，移動動作は全45単位，その場の動きは全14単位となった。移動動作のうち，歩行に関するものが16単位と最も多く，回る（旋回）の7単位を加えると，半数の23単位となった。続いて飛び（跳躍）に関するものが12単位，回る（回転）7単位，膝行2単位，

這出1単位と続いた。膝行や這出は，能楽特有，特に這出は狂言に特有の動作と考えられる。

身体部位に着目した観点からみると，上肢（腕・手）38単位，下肢（脚・足）15単位，頭部10単位，体幹1単位となった。ここから体幹は姿勢保持のため以外にはほとんど用いられていないことが分かる。

また，第一項目における基本動作は14単位であるのに対して，その他は87単位みられた。その他の区分の数に対して，基本動作の数が1/6以下であることから，狂言の動作の種類が固定されたものではなく，多岐に渡っていることが分かる。

一方，全体をとおして，単位の名称には，動作の内容と意味とを容易に想像することが出来るものが多かった。しかし，基本動作に限り，動作の内容は想像が付きやすいが，意味については抽象的になり想像しにくい傾向がみられた。また逆に，その他のうち特殊な型になると，共にきわめて想像しやすくなる傾向がみられた。

5. まとめ

本研究では，狂言小舞における動作単位の分類一覧を，他の芸能との比較も可能となるような動作学的な指標を用いて作成した。その結果，狂言小舞の動作の種類に関するいくつかの特徴が明らかとなった。

また今後，本分類一覧を元に狂言小舞の動作データベースを作成することを予定しているが，このようなデータベース作成の意義として，①他の芸能との動作種類の比較が容易となる，②型（動作）の伝承上の記録となる，③稽古者にとっての参考資料となる，④指導者にとって指導用資料となる，⑤新作の創作に役立つことなどが考えられる。また，作成する予定のデータベースは，リレーショナルデータベースとするため，完成後の検索は，名称（ふりがな），項目，方向，身体部位，動作の意味，前後に続く動作，含まれる曲名，頻度の高さなど，無数の観点から行うことが可能となる。さらに，静止画データ，動画データを始めとした視覚的な情報や，演者による指導言語や動きの諸注意などの情報も加えてゆく予定である。

今後の課題としては，羽田・松本による分類において無記入であった情報区分を実演家等への聞き取り調査を行い記入すること，視覚的情報の撮影及び編集などがあげられる。また，実際のリレーショナルデータベースの作成作業を行うことを最必の課題とする。

注釈

1) 動作単位とは、様式化され名称を持った最も短い動作単位である。近年、能・狂言での用語としては、所作という名称で扱われることが多い。しかし、本研究では他の

芸能との比較検討を行うデータベース作成を目的とする性格から、動作単位と表記するものとした。

2) 羽田・松本(1982, 1985)による狂言の動作単元に用いられた出自資料は次のとおりである。

流儀	書名	本論文での表記名	所蔵・発行	性格	発行	発行年	小舞数
大蔵流	虎寛筆小舞形付(仮称)	『虎寛型付』	四世山本東次郎氏蔵	家に伝えられた文書	—	—	22 (うち型付を記すもの16)
大蔵流	三世東次郎筆小舞型付(仮称)	『東次郎本』	四世山本東次郎氏蔵	家に伝えられた文書	—	—	23
大蔵流	大蔵流狂言小舞集	『茂山本』	茂山千五郎編	稽古用テキスト	茂山狂言会	昭和53年	38
和泉流	和泉流狂言集	—	吉田幸一編	江戸期の型付を伝える文書	古典文庫	昭和37年	18
和泉流	新編・狂言正本別巻	『正本』	野村萬斎編	稽古用テキスト	わんや書店	大正14年	41
和泉流	改訂・小舞謡	『小舞謡』	和泉保之著、三宅藤九郎改訂兼筆	稽古用テキスト	わんや書店	昭和24年	71

付記

本研究は、比較舞踊学会デジタル映像研究会における比較舞踊のためのデータベース作成の試み(<http://www.soc.nii.ac.jp/jscsd/dejiken.html>) (比較舞踊学会デジタル映像研究会2001)の狂言担当として進めたものである。また本分類における第1項目は、当研究会において選定を行ったものである。

引用文献

- 金城光子(1991)琉球舞踊譜の考案を求めて、琉球舞踊の世界—こころとからだ—, 琉球芸能文化学院, 沖縄: 185-197
- 小林ゆい(1999)狂言における構え・ハコビ・所作の動作特性—重心位置と足の動きの速さについて—, 比較舞踊研究 5巻1: 33-41。
- 羽田 昶・松本 雍(1982)狂言の動作単位(一)—和泉流小舞について, 芸能の科学(14): 127-156。
- 羽田 昶・松本 雍(1985)狂言の動作単位(二)—大蔵流小舞について, 芸能の科学(15): 53-71。
- 比較舞踊学会デジタル映像研究会(2001)比較舞踊のためのデータベース作成の試み, 比較舞踊学会第12回大会プログラム: 30-33
- 森下はるみ・花城洋子(1979)舞踊における歩行動作の研究[1][2]—すり足の歩容について—, 体育の科学, vol29: 46-51, vol30: 121-127。
- 山本東次郎(2002)狂言のことだま, 玉川大学出版部: 東京, pp. 27-34。
- 横道萬里雄編(1992)主要所作単位名対照表, 岩波講座 能・狂言 別巻 能楽図説, 岩波書店: 東京, pp. 361-364
- 横道萬里雄編(1992)所作単位一覧, 岩波講座 能・狂言 別巻 能楽図説, 岩波書店: 東京, pp. 332-360

参考文献・参考資料

- 花柳千代(1981)実技 日本舞踊の基礎, 東京書籍: 東京
- 波照間永子(印刷中)琉球舞踊における動作単位データベースの構築—アジア太平洋地域舞踊の比較研究のために—, 沖繩文化(芸能特集) 矢野輝雄先生追悼論文集。
- 松井今朝子編(1995)マルチメディア歌舞伎(デジタル歌舞伎エンサイクロペディア普及版)アスキー出版社企画・制作 マルチメディア図鑑シリーズ
- 東京国立文化財研究所編(1966)改訂標準日本舞踊譜, 創思社: 東京
- 早稲田大学演劇博物館 和泉流 野村万作 DVD 制作プロジェクト
- <http://www.waseda.ac.jp/enpaku/topics/2000/mansaku/mansaku.html> <http://infon.zkm.de/www/mmlab/html/kyogen.html>
- 横道萬里雄編(1992)岩波講座 能・狂言 別冊 能楽図説, 岩波書店: 東京
- 横道萬里雄・藤田隆則・古井戸秀夫(1999)型の未来, シンポジウム記録, 演劇学 6: 67-81